



The Spirit of Eternity Sword-1

Original Story ザウス
Novelization 三田村半月
Original Illustration 人丸

hh
HARVEST
NOVELS

プロローグ

5

第1章 来訪者

17

第2章 蠢く野心

51

第3章 狂乱の大地

85

第4章 生きる道

119

第5章 イースペリア消滅

153

第6章 ラキオス城炎上

187

エピローグ

224

プロローグ

雷鳴のような咆哮ほうこうであつた。

少年は身動きできなかつた。

鼓膜が震え、脳が痺しびれてしまつた。毛穴が開くほどの恐怖だ。身がすくむ。手足が一気に萎なまえ、あやうく気が遠のきかけた。

——死死……？

広大な洞窟の内部であつた。

岩壁にこびりつく光蘚ひかりこけが、藍色の鉱石が、淡く輝いている。自然が削りだした石柱いはざしが立ち並び、そのむこうは地底湖になつてゐる。空とつづいてゐるのか、天井からは幾筋いくすじもの眩まばゆい光が差し込んでいた。

——ここで……こんなところで……。

ラキオス王国の領土内であつた。

その北部から北東部にかけてひろがつてゐるリクディウス山脈の東部だ。だが、どの地図を探しても、そんな名称の国も山脈も洞窟も記載されてはいない。少なくとも、彼が数ヶ月前まで安穩あんのんと暮らしてきた世界の地図には——。

——俺は……死ぬのか？

頭が凄まじい勢いで回転していた。過去に蓄積してきた体験や知識を総動員して、めまぐるしく記憶がフラッシュバックしている。極限状態に置かれた人間に備わっている生存本能が働いているのだ。

結果は、絶望であつた。

生き残る道はない。なにもなかつた。あるはずもない。体格が、スピードが、戦闘能力が桁違いだつた。あまりにも生物としての格がちがいすぎる。最初から、勝てるはずがなかつたのだ。

なんという恐怖感か――。
なんという威圧感か――。

それは、恐竜のような巨躯きょくの持ち主で、莊嚴そうごんな美しさすら備えていた。

全身が磨き抜かれた青金石ラピスラズリのように輝いている。盛り上がつた胸筋、逞しい上腕筋や大腿筋、太い尻尾と岩でも切り裂けそうな鉤爪かぎづめは、その蓄えられた破壊力を充分以上に誇示し、背中にひろがつてゐる両翼でさえ、退化した飾りではなく、一目で実用的なものだとわかるほど雄々しかつた。

（リクディウスの魔龍）――。

恐怖いふを込めて、そう呼ばれている存在であつた。

装甲そうちょうのごとく分厚い表皮に覆われた頭部は、ぞろりと鼻先が長く伸び、後方へと三方に



割れている。牛をひと飲みにできそうな大口には、鋭く尖った牙が白い小石を敷き詰めた
ように整然と並んでいた。

硬い表皮に埋もれた眼が、ぎろ、と青ざめた少年を見下ろした。

『なぜ、汝は戦わない？』

知性と威厳を感じさせる声だった。

恐るべき魔龍がしゃべつたのだ。

『汝も、また虜のようではあるが……さあ、我を滅ぼしてみるがよい。愚かであることが
人間の性なのだから——』

少年は、魔龍が人間と同じように言葉を操ることは知っていた。彼は、みずからヘサードガラハムの門番」と名乗つたのだ。こんなときでなければ、神秘的で、幻想的な光景だと素直に感動できたかもしれない。

『その腰に下げている剣は、ただの棒切れにすぎないのか？』

空間を共振させ、魔龍は嘲笑つた。

挑発し、怒りを誘うかのようだつた。

だが、少年の魂は萎縮し、今にも恐怖で押し潰されそうだつた。この壮絶な生き物に比べれば、なんと自分たちの存在はちっぽけで、矮小で、とるに足らない塵のごときものであるか——。

残酷な、悪夢の世界だった。

たとえ悪夢であつても、夢であればいい。目覚めれば、あたたかい布団の中で、寝汗にまみれながらも安堵の吐息をつくことができる。そして、少年を起こしにくる可憐な義妹の足音と、彼を迎えてきた友人たちが鳴らす玄関のチャイムを聞くことができるのだ。

平凡で、なんということのない、いつもの日常がそこにはあつた。

しだいに現実感が薄くなってきた。理性が、恐怖をまぎらわそうとして麻痺してしまつたのかもしれない。

『しょせんは人間か……戦いを妖精たちに任せ、みずからはその楯の後ろに隠れる。……それでよいのか、人間よ？』

サードガラハムの声は、痛烈な侮蔑に満ちていた。

「うう…」

渴いた喉から、うめき声が漏れた。

視野狭窄に襲われるほどの極限状態とはいえ、ようやく、少年は頼もしい三人の味方たちに護られていることを思い出したのだ。

「だいじょうぶ……まだ、いける」

「ユートさま……ここは私たちが……っ」

「パパ……オルファ……がんばるよ」

アセリア、エスペリア、オルファリル——すでに三人とも満身創痍だつた。

魔龍と同じく、彼女たちもまた、空想の世界から抜け出してきたような美しい種族であった。みずから戦うために生まれてきたと頑なに信じている、スピリットと呼ばれている女性の姿をした妖精たちである。

たしかに、彼女たちは勇敢であつた。永遠神剣えいえんしんけんと呼ばれる不思議な武器を自在に操り、強力な攻撃魔法も持つてゐる。

しかし、それでも無謀な戦いだつた。

その巨躯にもかかわらず、魔龍は驚くほど敏捷びんしょくだつた。翼を操つて洞窟内を自由に移動し、スピリットたちの攻撃を硬い皮膚ひふで跳ね返し、豪腕と尻尾でなぎ払われて接近することすら難しかつた。

まだ戦闘に慣れず、足手まといでしかない少年をかばいながら、スピリットたちは確實に疲弊ひへいし、もはや俊敏に動く体力も残つていないようだつた。

それに引き換え、少年は、まだ傷一つ負つていない。

ひたすら、身をすくませて震えているばかりだつた。

悔しかつた。情けなかつた。

——なんで、こんなことに……。

洞窟に入るまでは、自分たちを死地へ追いやつた傲岸ごうがんなラキオス王を憎み、運命の理不

尽さを呪つていた。それまでも、何度も酷い目に遭わされ、屈辱感で胸が張り裂けそうになつていた。

だがそんな憎しみは、魔龍の出現で消し飛んでしまつた。

両膝が激しく震え、止まらない。今にも崩れてしまいそうだ。腰を抜かして、へたりこまなかつたのは奇跡のようなものだつた。

——佳織かおりを……護らなくちゃ……くそつ。死んでたまるかよつ。

義妹への想いが、からうじて踏みとどまらせていた。

武器ならば、少年も腰に帶びている。『求め』という名の永遠神剣だ。不思議なほど重さを感じない。肉厚の刀身が、猛々しく反り返っている。剣というより、巨大な鉈のようであつた。

だが、腕が、足が、痺れたように動かなかつた。

『……やはり、汝は戦わぬか？　ならば、このまま妖精たちを滅ぼし、汝もマナの塵としよう。さらには、哀れな妖精たちに命を下した者たちを滅ぼし、小さき者たちの都を火の海としてくれようか！』

「な……つ」

少年——高嶺悠久人の血は逆流した。

突如として湧き上がり、身を縛る恐怖心を焼き尽くしたのは、目が眩むほどの激しい怒

りだつた。あの王が支配している都など、いくら燃やされてもかまわない。しかし、あそこには義妹がいるのだ。

囚われの身となり、今も彼との再会を健気に待つてゐるはずだ。誰よりも、なによりも大切な少女だつた。あの笑顔とふたたび巡り会うためには、どんなことをしてでも、ここで魔龍を屠^{はふ}らなければならなかつた。

——俺たちは、元の世界へ戻るんだ！

悠人は、神剣の柄を握りしめた。

そのとき、急激に気温が低下していつた。

空気が白く凍りつき、みるみる岩壁にも霜^{しも}がおりていく。

「パパっ、あ、あれ：」

オルファアが驚きの声を放つた。

魔龍がまわりの熱を吸収してゐるのだ。牙を剥き出しにした口腔が真つ赤に染まり、紅蓮^{れん}の炎でいっぱいになつてゐる。

あれを放出されたら——。

「ユートさま、下がつて！」

エスペリアは必死に障壁の呪文を唱えはじめ、最後の特攻を決意したアセリアは無言で自分の神剣を握りなおした。

「おい、バカ剣つ、目を覚ませつ」

悠人は神剣を握り、強く念じた。

「俺が死んだら、おまえだつて困るんだろつ」

——我が力を……求める……か？

目覚めたのか、
「求め」から脈動するような手応えがあつた。

「俺が契約者だつていうなら、力を貸せ！」

——ならば、代償を支払うことだ……。

「いいから、力を寄こせつ。こいつをなんとかする力をつ
——多くのマナを……汝の血と肉を……そして……。
「力が手に入るならなんでもいいつ」

——汝の運命を捧げよ。

「ああ、支払つてやるつ」

悠人は、力の限り叫んでいた。

「だから……俺に、力をよこせつ！」

——よからう……汝の求め、しかと受けとつた。
「求め」は満足そうにほくそ笑んだようだつた。

「お、おお……つ」

その瞬間、神剣から、おびただしいエネルギーが奔流^{ほんりゅう}となつて流れ込んできた。五感が研ぎ澄まされ、意識が冴え渡る。すべての感覺が増幅されていた。細胞が残らず覚醒し、全身に驚くほどの力がみなぎつた。

「ユ、ユートさま？」

「ユート……どうした？」

「パパ？」

「ち、近づくなっ。下がつてろっ」

理性の抑制が外れ、陶酔してしまうほどの力だつた。強烈な衝動に支配されていた。喉の渴きにも似た、破壊への欲望が激しく疼いて^{うず}いる。ところかまわず剣を突きたて、思う存分えぐり込みたかった。

『燃え尽きよ！』

魔龍が紅蓮を吐き出した。

悠人は跳躍し、『求め』を叩き下ろした。

灼熱の炎が真つ二つに斬り裂かれた。

『……なにつ』

悠人は殺意の塊と化していた。

理不尽な運命への、傲慢^{ごうまん}なラキオス王への、愛する義妹を殺そうとした魔龍への怒りと

憎しみに身を任す。それは、紛れもない快樂だつた。さらに、凄まじい跳躍力を發揮して、一気に魔龍の懷まで飛び込んでいった。

「うおおおおおおおおつ」

刀身が、壯絶な輝きを帶びていく。靈的な光子オーラファトンが集中しているのだ。

硬い装甲を突き破り、深々と腹部せんこうをえぐつた。

充分すぎるほどの手応えだ。閃光をまき散らし、魔龍の腹部でオーラファトンが炸裂すると同時に、信じられないほどの愉悦が腰から頭頂までを突き抜けた。

『汝の持つ、その剣は大きな力有する』

魔龍の声が、子守歌のように聞こえてきた。

消滅への苦痛はなく、慈しみさえ含まっていた。

『汝はなにを求めて戦うのだ？ その剣が望むがまま戦うつもりなのか？ それとも別の意思が……。異世界の人間よ、求めるものに純粹たれ。みずからを信じることだ。それが心の剣となり、盾となろう』

渾身こんしんの一撃で、すべての気力を使い果たしてしまったのか——。

悠人の意識は眠るように遠のいていった。

エクの月、青みつつ日の日。

血のような朱に染まつた夕暮れのリクディウス山脈東部から、膨大な光の粒子が柱となつて天へ昇つていつた。